

# 東北 秘湯 紀行

東北には良質の温泉が多い。とくに火山帯の真上に位置する八幡平周辺は、古くからある湯治場が点在する温泉の宝庫だ。そこではさまざまな種類の温泉が湧きいで、人々が身をゆだねてくつろいでいる。温泉の魅力を堪能できる、6つの温泉を訪ねた。



秋田・玉川温泉の露天風呂

秋田の内陸部、瑠璃色の湖面に美しい風景を映し出す田沢湖。ここから十和田八幡平国立公園にかけての<sup>はちまんたい</sup>一帯は、古くからの湯治場の姿をとどめた温泉が残る貴重な地域である。

旅のはじまりは、秋田新幹線、田沢湖駅。まずは、田沢湖の北東にある乳頭温泉郷を目指す。湖畔からブナ林に囲まれた山道を車で40分ほど走ると、宿の案内板がちらほら現れはじめる。乳頭温泉郷は、この道沿いに8つの温泉が点在する。

その中のひとつ、「<sup>たえのゆ</sup>妙乃湯」に立ち寄ることにした。乳頭温泉郷では、秋田藩主の湯治場として知られた「鶴の湯温泉」がもっとも古いが、その少し先に位置するのが妙乃湯である。昔ながらの源泉かけ流しの湯はもちろん、モダンな和風インテリアの館内、きめ細やかなサービスが評判で、近年女性を中心に人気上昇中の宿だ。

乳頭温泉郷では、宿それぞれに源泉があり、その多様性が魅力だが、妙乃湯の源泉は、褐色の「金の湯」と透明の「銀の湯」のふたつ。まずは銀の湯がひかれた内湯へ。半世紀以上使われてきたレトロな湯船は、ほっと心が安まる懐かしさがある。しっとりした透明の湯は、リュウマチや婦人病に効くとのこと。

その奥には檜造りの露天風呂「寝湯」があり、これがなかなかいい。スロープのような背もたれの、ちょうど頭の



先達川の眺めも楽しめる「妙乃湯」の混浴露天風呂

ところに木の枕がしつらえてある。湯の中で横たわり、空を眺めていると、体が浮遊するような心地よさを感じてきた。こちらの湯は、褐色に濁った金の湯。さらりとした感触でありながら、肌に潤いも感じる。皮膚病や切り傷、やけどなどによいという。

そしてそのまた奥にあるのが、妙乃湯の名物、滝のように流れる先達川を望む混浴の露天風呂。風景も音も、自然のもの以外一切ない場所で湯に浸かっていると、五感が研ぎ澄まされていくようだ。

次に、来た道を引き返し、こんどは341号線を玉川に沿って北上する。時折眼下にダムや溪流を眺めながら1時間ほど車を走らせると、川のおちこちに白濁した湯の花や湯煙が見られるようになる。そうこうするうちに「玉川温泉」に到着。ここは、pH1.2という全国



妙乃湯：秋田県仙北郡田沢湖町生保内字駒ヶ岳2 1



玉川温泉：秋田県仙北郡田沢湖町玉川



新玉川温泉：秋田県仙北郡田沢湖町玉川字渋黒沢



湯煙につつまれる玉川温泉の自然研究路脇。この煙を吸うとぜん息に効くという

玉川温泉を引湯した新玉川温泉の内湯。強酸性の源泉100%の湯はあまりにも強く、肌がびりびりする。このため、50%の湯船と分けている



98 の源泉が猛烈な勢いで湧き出る玉川温泉の湯元・大噴。その量は毎分9000リットル。これが熱湯の川となって流れ出す

でも珍しい強酸性の湯で知られる温泉である。

「湯はあとにして、明るいうちにあたりを散策しましょう」という同行者の提案を受け、温泉の建物から少し離れた源泉の湧出口「大噴」へ。数分歩くと、噴気がモクモクと立ちこめた土や岩がむき出しの谷間があらわれる。道沿いに流れるせせらぎからは湯気が立ち、湯に含まれる硫黄で岩はきれいなレモン色に染まっている。道には、丸めたゴザを抱えた人々が行き交っていた。大噴の付近には放射線を発する「北投石」があり、その上に横たわるのは「岩盤浴」をする人々だという。

「これぞ地獄谷」といわんばかりに湯がグツグツと沸き立つ大噴を前に呆然としていたら、70代くらいの男性に声をかけられた。「私は気管支が悪くてね。暇ができたときに1週間ずつ来ている。今回が11回目で、今日で合計77日」

玉川温泉の蒸気は、ぜん息や気管支炎などによいと聞き、蒸気浴に来ているのだと言う。「こちらに座ってごらん下さい」と導かれ、岩の上に座ってみた。ポカポカと温かい。あたり一帯

には、多くの方がゴザを敷き、横たわっている。これが岩盤浴である。一角には露天風呂があり、岩盤浴の合間に湯を楽しむ人もいる。

その風景を見ていると、ふと、古い時代に迷い込んだような錯覚を覚えた。自然の持つ力にあやかり、その恩恵を受けるために集う人々。温泉地が観光地ではなく、純粋に“湯治場”

だった時代は、こういう景色だったのではないだろうか。

大噴から戻り、噂の強酸性の湯をいただくことにした。「源泉50%の湯船と100%の湯船がありますが、最初は50%で慣らしたほうがいいですよ」というすすめに従い、まずは50%の湯船へ。「玉川の湯は強いと何度か耳にしたが、その意味がようやくわかった。肌にジ



玉川温泉独特の岩盤浴の風景。人々はゴザを敷き、座ったり横になりながらラジウムを浴びる



源泉・秘湯の宿 ふけの湯：秋田県鹿角市八幡平ふけの湯温泉



藤七温泉 彩雲荘：岩手県岩手郡松尾村字寄り木北の又

ンジンしみるのである。100%のほうは刺激を抑えるためにかなり冷ましているが、さらにキューツとしみてくる。しみる感覚には個人差があるというが、こうして肌で湯の力をはっきり感じると、「これは効きそうだな」という実感がこみあげてくる。病後の疲労回復、神経痛、皮膚病、外傷の後遺症などに効くそうだ。

帰り際、胃潰瘍など消化器疾患によく聞き、浴場内の飲泉を飲んでみた。非常に酸味が強い。ユズかカボスの果汁を入れた薄めのジュースといったところか。食事の前に飲めば、消化を助け、食欲を増進させてくれるそうだ。

岩盤浴に入浴、飲泉……とさまざまな刺激的な体験をした玉川温泉を後に、341号線をさらに北へ。八幡平に向かう「八幡平アスピーテライン」に入り、こんどは南下する。どこまでも続く山、山、山……。樹木以外に何もなく、時折温泉やスキー場があるだけである。

八幡平アスピーテライン沿い1つめの温泉は「後生掛温泉」。玉川温泉からは車で40分ほどである。黒くにこった「泥風呂」や木箱から顔だけ出して温まる「箱蒸し風呂」などバリエーション豊富な風呂も魅力だが、ここの名物は何といても湯治客用の「オンドル宿舎」であろう。地熱を利用した床暖房は、しばらく寝そべっていると、じんわり汗が出てくるほどの温かさ。湯冷めを



野趣あふれる「ふけの湯」の露天風呂（写真は男性用露天風呂）

防ぎ、新陳代謝も高めてくれるそうだ。

玉川温泉同様、こちらの温泉にも自炊棟があり、長期滞在の湯治客が多い。1～2週間あるいは数カ月間滞在し、なかには何年も通う人もいるという。

後生掛温泉からさらに5～6分ほど上ったところにあるのが、「ふけの湯温泉」。アスピーテラインから少し脇に入り、曲がりくねった道を走っていると、山々の間から湯煙が見えてくる。まさに「秘湯」といった趣きである。この宿は、「日本秘湯を守る会」にも加盟するまさしく秘湯の宿。開湯は江戸宝永年間（1704～1711年）、約300年の歴史を持ち、最盛期は16棟の湯治棟に、1000人以上の湯治客が詰めかけていたという。八幡平一の歴史を誇る湯治場である。

現在は自炊の湯治棟はなく、旅館部のみだが、谷間にしつらえた露天風呂からの眺めは、おそらく当時と変わら

ないであろう。「秋は、青森トドマツの青とナナカマドの赤、カエデの黄色がグラデーションになって、それはきれいです。夏は一面が緑になり、枯れ木の季節も木肌の風合いに個性があって違う美しさがあります」と宿の女将は話す。この露天風呂は宿の建物から1分ほど歩いたところにあり、明かりはないが、夜間も入浴は可能。夜はフロントで懐中電灯を借りて行くのだとか。この日は雨がぱらつきはじめてのであきらめたが、満天の星に包まれての入湯はまたとない経験になるだろう。

ふけの湯の先は、舗装されているものの、さらに険しい山道となる。標高が高くなるにつれて寒さも増し、降っていた雨はしだいに雪へと変わった。途中、県境を越えて秋田県から岩手県に入り、20分ほどでアスピーテライン3つめの温泉、一軒宿の「藤七温泉 彩雲荘」に到着。八幡平の山頂にもっと



後生掛温泉：秋田県鹿角市八幡平熊沢国有林内



松川温泉 峡雲荘：岩手県岩手郡松尾村松川温泉

も近い温泉である。こちらも、ふけの湯同様、「日本秘湯を守る会」加盟の湯宿で、東北一高い場所にあることでも有名だ。

入口のドアを開こうとしたとき、ふと貼り紙が目にとまった。そこには、「公衆電話もテレビもありません」の文字が。携帯電話に目をやるともちろん「圏外」。完全に日常から離れ、解放された気分で浴場へと向かう。

内湯に併設された露天風呂からは、源泉が湧き出る谷が一望できた。あちこちでモクモクと噴気が立ち昇り、静けさの中で大自然のエネルギーを目の当たりにする。雨はやんだが、あたりは霧に包まれ、雲と同じ乳白色の湯に浸かっていると、まるで自分が雲の中にいるような感覚だ。

後で確認したところ、宿のある場所は標高1400メートル。冬は雪深く、道路も通行止めになるため、11月初旬から5月初旬までは休業となる。それは、ふけの湯温泉も同じだ。除雪車が来るのは、玉川温泉や後生掛温泉までなのだとか。雪が降らずとも、気温が低いと道路が凍結して危険なため、その期間以外でも日によっては通行止めになることもある。まさに、時期によって



彩雲荘の混浴露天風呂入口



松川渓谷沿いにある岩手・松川温泉「峡雲荘」の混浴露天風呂。右奥に見える噴気が、日本で初めて建てられた地熱発電所からのもの

は訪ねるのも困難な秘境の温泉なのだ。

さらにアスピーテラインに沿って先へ進む。ここから先は下り坂。約40分であろうやく最後の目的地、松川温泉に辿り着いた。盛岡からであれば、1時間ほどで到着できる。

4軒ある宿のひとつ、「峡雲荘」に立ち寄る。ここの湯は、実に白い。底が見えないほどに白く濁っており、見た目の通り、肌触りもまるやか。湯の効能は、「神経痛や婦人科疾患、糖尿病など」とある。男湯・女湯・混浴風呂、どの露天風呂も松川沿いにあり、対岸の山の麓からは、今までに見たことのないすごい迫力で、これまた真っ白な噴気が立ち昇っている。

「あれは日本初の地熱発電所。歩いてすぐだから、湯からあがったら散歩してみるといいですよ」

同じ湯船にいたご婦人が、慣れた調

子で説明してくれた。近所の農家の方で、天候のせいで作業できない日や疲れがとれないときによく来るのだと言う。この日は少し雨が降ったからであろうか、とくに地元の方が多い。日常的な癒しの場として親しまれる生活に密着した温泉 またもや、温泉本来の姿をかいま見た思いがした。

今回訪ねた6つの温泉は、どこも宿泊だけでなく、日帰り入浴も可能なので、3日もあれば6つの湯を十分楽しめる。しかし、こうしたさまざまな温泉地の空気と湯の違いを体験する湯巡りの旅も楽しいが、次は休息の必要を感じたときに長期滞在してみたいな、とも思う。自炊棟で生活してみるのもいいだろう。ここ八幡平の温泉には、気負いなく生活の延長で過ごせる身近さと、不調を抱えた人を優しく包み込む懐の深さがあるのだ。